

中島敦の南洋物の創作意識について：「夾竹桃の家の女」を中心に

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 閻 瑜 |
| 雑誌名 | 大妻国文 |
| 巻 | 46 |
| ページ | 83-95 |
| 発行年 | 2015-03 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1114/00006084/ |

中島敦の南洋物の創作意識について

——「夾竹桃の家の女」を中心に——

閻

瑜

はじめに

中島敦は一九四一年六月から翌年三月まで南洋庁へ内務部地方課国語編集書記に赴任したことがある。短篇小説「夾竹桃の家の女」は、中島が一九四二年三月に南洋から東京に戻ったおよそ四、五ヶ月後に、南洋の民話や印象に残った人々や経験に基づいて書き上げ、第二の作品集『南島譚』(今日の問題社、一九四二年十一月)に収めた九篇の短編のうちの一作品である。『南島譚』は発刊当時、坂口安吾、平野謙といった著名作家や評論家に高く評価され、しかも、発刊一年後に三千部も再版された。^③ところが、中島敦の南洋物についての先行研究が少なく、「夾竹桃の家の女」についてはほぼないという現状がある。^④

そして、戦争讃美の戦争文学・国策文学が数多く創作されていた戦争のさなか、中島は時代便乗の風潮には乗らずに、南洋物を含め、一見時代と無縁な作品を書き続けていた。中島はどういう考えに基づいて南洋物を創作し、彼の南洋経験がその後の最晩年の作品に何か影響を与えているのか。本稿は「夾竹桃の家の女」を中心に、時代背景を結びつけて中島

の南洋物の創作意識について考えたい。

一、「夾竹桃の家の女」について

「夾竹桃の家の女」は一九四二年七月、八月頃に書き上げた「環礁」を総題とする南洋物の一篇であり、原稿用紙十枚あまりの短篇である。南洋の島の蒸し暑い午後、デング熱がまだ治りきらない「私」は散歩する途中、耐えられない程の疲れとどるさのため、赤い花が満開した夾竹桃のある島民の家で休ませてもらおうと思った。そこには白猫が一匹しかいないようで、勝手に上がり端に腰掛けて休むことにした。ところが、一服してから振り返ると、一人の若い女性が色っぽい目つきで「私」を見つめていた。病後で体が弱い「私」は過ちを犯さずに済んだ。そこで、腰を上げてこの家を後にした。家に帰って昼寝をしていた「私」は猛烈なスコールに目覚め、雨が上がってから外に出ると、先ほどの夾竹桃の家の女が歩いてきた。しかし、彼女は、「私」が夾竹桃の家を出た時の怒っている顔つきではなく、全然「私」を認めないような無表情な顔であった。

中島の日記・書簡や親友土方久功の回想と照らし合わせると、作者中島は主人公「私」のようにデング熱にかかったことがあり、しかも、夾竹桃の家の女は実在の人物をモデルにしていると考えられる。

中島敦は南洋に着いてからほとんど病氣ばかりしていた。最初の一ヶ月は喘息が少しよくなると急性大腸カタルで寝込み、八月下旬になったら今度はデング熱にかかり九月中旬になってようやく完治した。これらの状況は一九四一年八月十七日、二十五日、そして九月十三日付の父・田人に宛てた書簡、および同年九月二日の妻・タカや友人に宛てた書簡で確認できる。八月下旬から九月上旬という発病の時期も「夾竹桃の家の女」の蒸し暑い時期と一致している。彼は一九四二年一月十七日から三十一日まで、南洋で知り合った親友土方久功⁵と二人だけで、パラオ本島一周の旅に出た。出発から二

日後の十九日の日記には、次のような一節が記されている。

土方氏とウルボサン部落へ散歩。(中略) 一軒の家に立ち寄る。老爺一人。少女二人。赤ん坊に乳をふくませをる若き細君の顔。妙に煽情的なる所あり。パイプ(竹)を削る土方氏。帰つて昼寝。五時頃又、土方氏と外出。

この「赤ん坊に乳をふくませをる若き細君の顔。妙に煽情的なる所あり」という描写は、「夾竹桃の家の女」に登場する女性の様子に酷似している。中島は実体験に基づいて「夾竹桃の家の女」を創作したと考えられる。

しかし、「夾竹桃の家の女」においては、中島の創作が盛り込まれている。一つはいつの間にか消えた白猫の存在であり、もう一つは夾竹桃の家の女の表情についての描写である。

白猫は最初誰もいない薄暗い部屋の中で、床の上にねそべっているだけである。眼をさまして「私」のほうを見たが、「一寸咎めるように鼻の上を擧^{とが}めたきりで、又目を細くして寝て了^{しま}つた」のである。「私」は縁に腰掛けて一服してから振り返ると、白猫が消えて、さきほど誰もいなかったはずの部屋には、一人の若い女がいる。「ひよつとすると、先刻の猫が此の女に化けたんぢやないか」と、一瞬そんな気がしたのである。

次は女性の目線に注目しよう。白猫が化けたではないかと思わせる女性は、産後間もなく、赤ん坊に乳を含ませている若くて綺麗な人で、「目付の中に異常なもの」を帯び、「唇を半ば開いた儘、睫の長い大きな目で、放心したやうに此方を見詰めてゐる」。その目は「私」を大変驚かせた。なぜかというと、

こんなに眼を外らさない女は無い。殆ど目を据ゑてゐると言つても宜い。熱病めいた異常なもの迄が、其の眼の光の中に漂つてゐるやうである。

「私」もその目を外らすことをせず、彼女と無言で向い合っているうちに次第に「微かながらエロティッシュな興味」が生じ、「妙に縛られて行く」ように感じ始めたのである。

私には先程からの、女の凝視の意味が漸く判つて来た。何故若い島民の女が（それも産後間もないらしい女が）そんな気持になつたか、病み上りの私の身体が女のさういふ視線に値するかどうか、又、熱帯ではこんな事が普通なのかどうか、そんな事は一切判らないながら、とにかく現在のこの女の凝視の意味だけは此の上なくハッキリ判つた。

しかし、「熱帯の魔術にかかつてゐたやう」で、「泥酔したやうな変な気持」を持つていた「私」を救つたのは、病後のだるい体であつた。「私」は立ち上がり「サヨナラ」と言つた。しかし、女性は何も答えず、「酷い侮辱を受けてもしたやうに、明らかに怒つた顔付」で「私」を見据えた。その後、家に戻つて昼寝をしている「私」は激しいスコールに目覺めて外を出ると、向こうから歩いてきた先ほどの夾竹桃の家の女と擦れ違つた。しかし、女性は私に目を向けもせず、「怒つてゐる顔付ではなく、全然私を認めないやうな、澄ました無表情な顔」をしていた。これがラストシーンである。

つまり、女性は最初に目に「異常なもの」を帯びてエロティックなことを期待するかのように「私」を見つめていたが、「私」に拒否された後、「怒つた顔付」に変わった。しばらくたつた後、「全然私を認めないやうな、澄ました無表情な顔」になつてしまふのである。この短篇は女性の表情の変化に何も感想を加えずに終わつてしまふ。しかし、最初から最後まで不思議で、神秘的な空気に包まれている。猫、特に白猫は古くから「神の使い」とされている。ここで、作者中島は日記に記されていない白猫を登場させるのは、南洋女性の不思議さ・神秘さを際立たせるためであろう。

二、「夾竹桃の家の女」とその時代

「夾竹桃の家の女」は中島敦の南洋生活の一断片を描いているもので、全く戦争という時勢を感じさせない。戦時中は、国民への精神教育として作家の協力が求められ、多くの戦争文学や国策文学が現れるようになった。その時代の流れなのか、火野葦平が国民的作家となった。火野の成功を受け、戦場への作家の動員が本格化になっていき、日本国内では次第に新聞・放送・出版・映画などのメディアが統制されていた。さらに、「夾竹桃の家の女」などの南洋物が創作された一九四二年には、日本文学報国会が結成され、作家の国策への協力体制が整っていった。

中島敦は時代と文壇の流れには関心を持たず、自分の世界に閉じこもって創作活動を行っていたのではなく、いち早くこの時勢をはつきりと意識し、文壇にも変わらぬ関心を持ち続けたのである。

例えば、一九四一年八月十七日付の父に宛てた書簡には、パラオでは「昨日から防空演習」と、同年十月十二日の日記においても、視察先の秋島では「本日より防空演習」と記している。そして、九月十日の日記には、アルミヅ島の部落の石畳路が掘り起こされて軍用道路となるのを見ると、同行の親友土方久功は「頻りに嘆く」と記している。土方と意気投合していた中島も同じ心情であろう。日米開戦のことはもちろん、ラジオで開戦の知らせや首相の演説などを聞いたと同年十二月八日の日記に記している。その後の日記には戦況ニュースが多く記されている。ほかに、中島敦の体を心配して南洋に來たいと言う妻タカを説得してもらうために、父に手紙を書いた。この四二年八月二十二日付の父に宛てた書簡においては、今の問題は自分の体調ではなく、「国際情勢の逼迫」と「群島の食糧問題」であり、「こんなに情勢が緊迫してつて」と非常の事態を伝えたい、「詳しく書くことが許されておりませんので、困るのですが、将来の非常な危険を予想しないでは、此方へ来ることは出来ないやうな有様です」と書いている。これらの書簡や日記から、中島は時勢を強く

意識していることがわかる。時局のほかに、彼は相変わらず文壇にも関心を持っていた。四一年九月二十三日と十二月八日の日記および九月二十八日付の妻タカに宛てた書簡によると、中島は南洋庁で読める『文藝春秋』、『改造』、『中央公論』のほかに、父に送ってもらった『文学界』、『文藝』、『新潮』を読み入っており、『朝日新聞』に載っている座談会にも関心を持ち、島木健作の『満州紀行』など当時の話題図書についての読後感も記している。

中島は遺稿「章魚木の下で」(『新創作』一九四三年一月)において、「文学」と「戦争」の関係については、「戦争」と「文学」とは全く別のもので、「文学」が「国家目的」に役に立てるものではないと述べた上に、次のように語っている。

自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑しい。感動はあつても未だ文学的なものに迄醗酵しないし、古い題材では矢張何かしつくりせず、其の他種々の事情から現在が書きにくい時期だといふことは判る。だから、書けなければ書けないで、何も無理をして書かなくともいいのではないか。(中略)却つて文学を高い所に置いてゐるが故に、此の世界に於ける代用品の存在を許したくないだけのことである。食料や衣服と違つて代用品はいらない。出来なければ出来ないで、ほんものの出来る迄待つほかは無いと思ふ。だから、つい斯んなものの言ひ方になるのである。

章魚木の島で暮らしてゐた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別してゐたのは、「自分が何か実際の役に立ちたい願ひ」と、「文学をポスターの実用に供したくない氣持」とが頑固に素朴に対立してゐたからであつた。

戦時下において、功利的に文学作品に国策的色彩を施し、時代便乗的な作家たちへの批判とともに、「文学を高い所に置いてゐる」ために、「文学をポスターの実用に供したくない氣持」を強く持っているのである。文学が戦争と国家目的に利用されたくない、という文学の純粹性を守ろうとする中島の強い信念が読みとれる。

実際に、戦争のさなか、中島敦は「夾竹桃の家の女」のような南洋物を含め、功利的で国策的な作品を一篇も書いていない。彼はそれぞれの作品を芸術品に仕上げるという想いで創作活動を続けていたのである。

「夾竹桃の家の女」という短篇は、「私」の「サヨナラ」を除き、夾竹桃の家の女と一言も会話を交わすことなく、ただ蒸し風呂のような蒸し暑い空気と「私」の心理活動、そして女性の表情の変化だけを細かく描いている。全篇に神秘的かつエロティックな雰囲気漂っている。この作品は創作された一九四二年七月、八月頃と思われるほど、時代を感じられないものである。中島敦は「戦争」と遠く離れた「高い所」に「文学」を置いていることによって、戦争に対して芸術的抵抗⁶を行っていたといえよう。

三、南洋物とその後の作品形成

中島敦の作品には女性を真正面に描くものがほとんどない。女性を主人公とするのは、南洋物の「夾竹桃の家の女」と「マリヤン」のほかに、第一高等学校時代の習作「下田の女」（第一高等学校校友会『校友会雑誌』第三百十三号、一九二七年十一月）しかない。

「夾竹桃の家の女」の女性は、昼ごろに夾竹桃の花がたくさん咲いている家で見かけた時には、家にいた白猫が化けたではないかと思わせるほど不思議なところがあり、「目付の中に異常なもの」を漂わせて「私」を見つめていた。しかし、病後で衰弱な「私」は彼女にサヨナラと日本語で言った時、「酷い侮辱を受けたでもしたやうに、明らかに怒った顔付」になった。およそ三十分後、「私」は再び家の近くの敷石路でこの女性とすれ違った時に、彼女は無表情な顔をして「私」に目を向けもしなかった。このような女性の気持ちの変化の早さを描くことを通して、島民の不思議さ、人間の心の難しさを描き出しているといえよう。

この女性の心が変わりやすいという認識は、「下田の女」に通じていると思われる。習作「下田の女」においては、「私」は旅先で友達となった下田の女性から、二人の男との恋愛経験を聞いた後、女とは何かと疑惑を抱えるようになる。一人目の東京の学生である青年に対しては、「お金、どの位お出しになるお積り？」と言って青年を拒否したが、翌日、「恋愛は性欲以上のものだなんて言ふ人も大嫌い」と手紙に書いた。二人目の肉欲しか知らない四十男に対しては、「あなたは肉欲は知つても恋は知らないのだ。(中略)一生に一度位は真面目な恋をして御覧なさい」と言つて怒つたのである。男性の扱い方の違いを見て、「私」は女というものは、「一つ型に鑄込んで作られたもの」ではなく、「二重人格」を持ち、「時と場合でカメレオンみたいに色を変える」という認識を得たのである。「下田の女」については、鷺只雄氏は表面上「感情的、叙情的」であるが、裏には「理知的、分析的」傾向があると指摘している。「夾竹桃の家の女」についても、同じく評価ができる。

一方、「マリヤン」においては、西洋列強が利益のために強制的に行つた文明統治は島民に不幸しかもたらさないと訴え、マリヤンはまさにこの文明統治の犠牲者である。作品はマリヤンの会話、行動、服装という外見的な描写だけを通して、西洋文明と伝統生活のはざまにいるマリヤンの内心の矛盾と寂しさを伝えている。^⑧

ほかに、南洋の人間の不思議さと難しさを描いているのは、親友土方久功の日記に書かれている「鶏」に基づいた同名小説「鶏」もある。南洋に滞在していた頃、中島は朝、昼、晩と一日に三度も土方の家に行き、土方の日記を勝手に読むことを許されていたため、「鶏」「ナポレオン」などの創作の素材を得たのである。「夾竹桃の家の女」は直接に土方の記録に取材していないが、土方と一緒に旅に出かけた時の経験と関係している。ところが、中島は土方から得た素材をそのままではなく、書き換えや付け加えを行つて小説に仕上げたのである。「鶏」も同様土方の日記にある原作に対する改作を通して、人間の本性に迫る作品に仕上げたのである。島民には不思議なところを持っているという前置きを設け、さらに、お爺さんの好悪さと貴重な鶏の贈り物とを調和できず、「人間は死ぬ時には善良になるものだ」、「人間の性情は一定不変の

ものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ」という感想を漏らしている。土方の人間の「優しさ」に注目するのは違い、中島の「人間」に対する形而上学的な認識は深刻なものである。⁽¹⁰⁾

ほかの南洋物においても、人間の生き方といった形而上的問題についての考えが描かれている。「幸福」では、人間の真の幸福がある伝説的な島民から答えを得ることができた。圧倒的な権勢と財力を持ち、人々の想像以上に豪華な生活を送る島の第一長老は決して幸せではない。下僕の中でも一番卑しい身分であり、物置小屋に住み、犬猫に与える餌しか食べられず、過酷な労働を強いられているものの、とても満足している下僕のほうが、足るを知る心を持っていることで、幸せに暮らすことになったのである。そして、「寂しい島」は子供がなかなか生まれず、一人の子供しかいない小さな島を描き、人類の最初と最期、そして宇宙における地球と人類の運命について考える小品である。

我や人間とは何か、といった形而上学的な疑問は、初期創作の段階から中島を深く悩ませていたのである。彼の初期作品の主人公たち、たとえば、「北方行」の黒木三造と折毛伝吉、「狼疾記」の三造、および「悟浄歎異」の悟浄は、自己の存在さえも疑い、「我とは何か？」に固執し、存在や運命の不確かさと偶然性に、常に不安と恐怖感を覚え、形而上的な問題に悩んでいる。この形而上学的苦悩はそのまま中島敦のものであり、「一身両口」(「かめれおん日記」)の虫のように、内攻によって益々激しくなる。この形而上学的問題にこだわる「狼疾」⁽¹¹⁾のせいで、中島の小説は「肩や背まで失」(「狼疾記」)い、創作活動を順調に展開できなかったのである。

中島敦の分身である悟浄(「悟浄出世」「悟浄嘆異」)は、「我とは何か」といった形而上学的思考に心身的に苦しんでいるため、救済の道を求める旅に出かける。中島自身も同じ道程を歩み、答えを求めるために多くの書籍を渉猟していた。読書遍歴のうち、博覧強記の中島敦は、東西問わず、数多くの賢者の思想を吸収し、多かれ少なかれそれらの影響を受けていたと推測できる。一方、中島敦はこのような古今東西を渡る書物の渉猟を通して、悟浄のような形而上学的問題の答えを見つけたのと、悟空の強い行動力を見習おうと決心したため、苦悩から抜け出すことができたと思われる。

「光と風と夢」において、原典に基づき、島民を心から愛し、サモアの内戦を防ごうとするために奔走し、文学者としての良心を持っているステイヴンソンの姿を生き生きと描き、植民地にいる良心的な人間の生き方について探求している。

南洋滞在の経験に基づいた南洋物は、人間の心や宇宙における人間の運命など、人間とは何かという形而上的な問題への追究ともいえよう。南洋から帰ってから亡くなるまで十ヶ月の間に、「弟子」「李陵」「名人伝」などの名作を集中的に書き上げることにも注目すべき事実であろう。南洋滞在の経験は中島敦作品の形成において大きな存在であることが推測できる。

南洋から帰った後の作品を見てみよう。「弟子」の子路は、師孔子に対して無条件の尊敬と感服を持っているため、師の不遇を見ると、「邪が榮えて正が虐げられる」という事実に大いに悲憤と憤慨を感じ、天に対する懷疑を覚え始める。同じく、「古俗」という総題の下に収められている「盈虚」「牛人」も人間の運命を凝視する作品である。「盈虚」の蒯聵は亡命時代の十数年の苦勞で、「氣まぐれで我が儘だった白面の貴公子」から「刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人」に変わり、その「ひねくれた中年の苦勞人」の性情のままに動いたために、死を迎えることになった。一方、「牛人」の叔孫豹の死は恩人にあたる息子の牛人を無条件に信頼したあげく、裏切られた結果である。蒯聵と叔孫豹は自分の所為によって、自分の運命が決まるといふ、人間の存在のあり方を追究した結果のモデルと言えよう。最後の作品「李陵」に至ると、人間の運命についての認識がさらに深まっていく。司馬遷も蘇武も運命に翻弄されていたが、その結末はそれなりの必然性があるといえる。また、李陵に関する事件はそれぞれが深くかわり、李陵の運命の発展の必然性を物語っている。

このように、人間の運命や存在のありさまたといった形而上的思考は中島文学に貫かれている一つのテーマといえる。初期作品では、随所に見られるこの問題に関する苦悩・不安・焦燥は、物語の展開を阻害してしまいが、「山月記」になると、自分の作品創作には「何処か（非常に微妙な点に於いて）欠ける所があるのではないか」と気付き、「悟浄歎異」においては、心身的に形而上学的思考に苦しまれることから自分自身を解放できるようになる。更に、「光と風と夢」や『南島

『譚』に収められた南洋物になると、人間の存在と運命についての認識がさらに深まっていく。これは最後の名作「弟子」「李陵」などの誕生につながるものであろう。

おわりに

「夾竹桃の家の女」のような南洋滞在の経験に基づいた南洋物は、戦争のさなかに創作されたにもかかわらず、全くその時代を感じさせない作品群である。文学の純粹性を守り、文学で戦争に協力しない中島の気骨と姿勢は、当時の「ほんもの」の文芸作品が少ない文壇に新風を送り、公表当時高く評価されていた。これらの南洋物は、人間の心や宇宙における人間の運命など、人間とは何かという形而上的な問題を追究するものである。中島は南洋から帰ってから亡くなるまで十ヶ月の間に、集中的に名作「弟子」「李陵」などを書き上げた。この南洋滞在の経験は中島敦作品の形成において大きな存在であるといえよう。

注

(1) ちくま文庫『中島敦全集 第二巻』解題（筑摩書房、一九九九年十月）の勝又浩氏によると、『南島譚』に収めた南洋物は、一九四二年七月から八月にかけての頃執筆されたと推測できる。

(2) 『文芸』一九四三年十二月号は読者アンケートを行い、新人小説や従軍記、最も感銘を受けた作品という内容で、その年の文学作品についての感想を募集した。中島敦に関する葉書は五通ある。坂口安吾は今の新人作家は既成作家以上に不新鮮であり、「むしろ中島敦氏の着実な仕事は私には最もものしかつた」と、平野謙は「中島敦『南島譚』、石川淳『山桜』などを愛読しました。（中島敦は実に惜しいことをした、近年新人と呼び得る殆ど唯一一人の人だつたのに。）」と、織田正信は「かりにも文芸の名に値する作品が幾つあつたでせう。強いて挙げれば、今は故人の中島敦氏の作でせう」とそれぞれ回答している。

- (3) 一九四三年十一月二十日に三〇〇〇部再版される(同注(1)前掲解題)。さらに、勝又浩氏の調査によると、『南島譚』の初版には「初刷三〇〇部」と「初刷三〇〇〇部」二種類のものがある。「初刷三〇〇〇部」であれば、中島敦の最初の作品集『光と風と夢』(筑摩書房、一九四二年七月)と同数である。しかし、『光と風と夢』の再版は『南島譚』よりおよそ一年半遅く、一九四五年三月二十日に「一〇、〇〇〇部」再版されている。

- (4) 「特集 中島敦を読み直す 夾竹桃の家の女」(『望星』第三九号、二〇〇八年八月)は確認されている。

- (5) 中島敦は南洋庁教科書編集書記として南洋庁に赴任していた時、彫刻家、画家、民俗学者である土方久功(一九〇〇—一九七七)と親しく交友し、親友関係を結んだ。

彫刻家であり画家であり日本初代の民俗学者ともいえる土方久功は若い頃から世界の民俗文化に関心をもちはじめ、日本美術界が傾倒した近代西洋美術に反映するアフリカや南洋などの「未開文化」を自己の美術表現に直接吸収するため、一九二九年、二九歳の時、日本の委任統治領であったパラオ諸島に渡った。島の言葉を覚え、習俗や民話を記録し、島民の相談ごとを聞き、南洋群島で合計十四年暮らしたことがある。一九四二年三月四日に中島敦と一緒にサイパン丸に乗って帰国した。帰国後、土方は引き続き木彫レリーフや彫刻の制作を行い、日本と南洋を融合した表現の成果を積極的に発表した。さらに、執筆活動及び著作に掲載する挿絵の制作を旺盛に行い、すべて『土方久功著作集』(全八巻、三二書房、一九九一年)に収録されている。

- (6) 第二次世界大戦中、フランスにおける「抵抗」と「抵抗の文学」についての全体像を、はじめて客観的に、文学的に明らかにしたのは、加藤周一氏の『抵抗の文学』(岩波書店、一九五一年三月)である。それによると、「抵抗」は第二次大戦の間、フランスにおける解放運動を指し、「抵抗の文学」は抵抗という国民的運動とその体験との中から生まれた新しい文学である。

戦時下、中島敦のような戦争文学を書かないでいた作家の姿勢について、「芸術的抵抗」を貫いたという観点もあるし、「芸術的抵抗」そのものの存在を疑う意見もある。それらを整理してみると、中島文学に対し、「芸術的抵抗」「主張論」と「芸術的抵抗」否認論という正反対の意見があるが、それ以外、中島敦が「純粹に芸術を守った」という見方もある。

- (7) 「初期の習作——豊饒な可能性」、鷺口雄『中島敦論——「狼疾」の方法』(有精堂、一九九〇年五月)に所収

- (8) 拙稿「中島敦の南洋物にみられるその時代意識——「マリヤン」を中心に」(『大妻国文』第四五号、二〇一四年三月)を参照

- (9) 岡谷公二著『南海漂泊——土方久功の生涯——』(河出書房新社、一九九〇年八月)と土方久功「トン」(『土方久功著作集』第六巻、三二書房、一九九一年十一月)を参照

(10) 拙稿「中島敦の南洋作品の形成における土方久功の影響——「鶏」を中心に」(『国際日本学』第十二号、二〇一五年三月)を参照

(11) 「狼疾記」の序文は、『孟子』告子章句上にある「養其一指、而失其肩背、而不知也、則為狼疾人也」を引用している。一本の指を養うだけで、肩や背を養うことを忘れているなら、それは疾める狼のように、自らをかえりみることの出来ない人とされる、という意味である。些細なことにこだわりすぎると、大事なことやすべてを失ってしまうことを表している。

* 中島敦の作品の本文の引用(傍点を含む)は全て『中島敦全集』(筑摩書房、二〇〇一年)による。ただし、旧字は全て新字に改めた。